

第2セッション

「知の公開／知の再構築 —大学は放送公開講座から何を得たのか—」

広瀬：これから第2セッションに入ります。大学放送公開講座は昭和53年に開始され本年で20年の節目を迎えました。その役割は、時代とともに大きく変化して参りました。テレビ、ラジオといったメディアの特性を活かしながら、不特定多数の一般視聴者の方に、大学の学問をいかに興味深く伝えるか、これこそがこの講座の取り組みの歴史であったと思います。ある時は、タイムリーな話題、地域の現実感の溢れる問題、またある時は、難解で難しいと思われる学問、こうした学問を目から鱗の落ちるような映像や、臨場感あふれる音声に乗せて、ワクワクするような学問の喜びを、一般視聴者達とともに味わう。カメラの前で緊張して汗だくだくの先生も沢山いらっしゃいました。また、分野の違う研究者が、喧喧諤諤の議論をして、1つの大きなテーマに取り組んでいった歴史もございます。そうした放送公開講座の醍醐味というものに対して、毎年数十万の方達の視聴者、また多様な年代の層から、大きな反響がございました。本セッションでは、この公開講座の発信元である大学側に焦点をあてたいと思います。大学の知識を公開することによって、一体大学はこの20年間に何を得てきたのでしょうか。それについて本日議論を進めていきたいと思ひます。

それではまず、私の横にいらっしゃる先生をご紹介したいと思います。指定討論者として、東京経済大学の山中速人先生にお越しいただきました。山中先生は、メディア教育開発センターが放送教育開発センターの時代に、長らくこちらでお仕事をなさっており、この公開講座についても、様々な形で研究をなさってきたお一人だと思ひます。それからこのセッションの中では、名古屋大学、また熊本大学の先生に話題提供をしていただきたいと思います。

さて、この第2セッションのテーマは、大学放送公開講座を通じて、大学は一体何を得てきたのか、放送局から、また一般の視聴者に分かり易く伝えるということによって、一体大学は、大学の授業は、また大学の教員達は、どういうものを身につけてきたのでしょうか、ここに焦点があてられると思ひます。

では、まず最初に名古屋大学の今津孝次郎先生にお話を伺いたいと思ひます。今津先生は長年、この放送を利用した大学講座の研究テーマに携わってこられました。その研究成果を今津先生は『放送利用の大学公開講座ハンドブック：次世代への継承』（放送教育開発センター研究報告書98号）に、「放送教材の制作」と題する論考としてお纏めになっておられます。では、今津先生、宜しくお願ひいたします。

今津：名古屋大学の今津です。どうぞよろしくお願ひをいたします。それでは私の方から、この20年間、大学が放送公開講座から得てきたものにつきまして、どちらかというと原理的な側面、基本的なレベルに限って、簡単にお話させていただきたいと思ひます。

この放送公開講座は、もう改めて言うまでもなく、元々の狙いというのは、放送大学を開学するための準備でしかなかったわけですね。そういう意味で、実験放送として始まったわけですが、それから20年間大変長い年月に及びましたが、実験放送が毎年繰り返されてきたわ

けであります。

ところが、放送大学を全国で開いていく為の準備の活動という目的を越えて、思いがけずに非常に幅広く、また非常に奥行き深い成果が、得られてきたのではないかなと思います。一言で言いますと、いまの大学改革の時代に当り前のような言葉にはなっておりますけれども、「開かれた大学づくり」ということを、実はこの20年間実験的に試みてきた。

放送というメディアを媒体にして、地域のいろんな生涯学習機関をも含み込んだ、非常にユニークな取り組みとして「開かれた大学づくり」をやってきたのだ、というふうに思います。

放送大学と放送公開講座とは、実はかなり性格が違うものでして、私なりにちょっと大雑把に纏めた表がございますので、少しご覧いただきたいと思います。まず、表1に示した対象者数ですが、放送大学の学生数は最近のデータで約6万人ぐらい。それに対する放送公開講座の利用者数ですが、全国の視聴率あるは聴取率等々から推測をいたしますと、おおよそ100万人。これはスクーリングを受けてない方も含む数ですが、全国で膨大な方々がこの講座をご覧になったり、あるいはお聞きいただいたということです。こういう点で、規模的にまるっきり性格が違います。

表1 放送大学と放送公開講座

相 違 点	放 送 大 学	放 送 公 開 講 座
対 象	放送大学生約6万人	一般市民約100万人
生涯学習機会	入学・受講手続き	手軽で身近
テーマ設定	全国共通	各地域のニーズに応える
内 容	大学教育科目	各大学の研究成果の還元
教材開発	地域範囲の限定	地域範囲の広がり多様性
教育方法改善	放送大学のみ	各大学の広がり
大学への理解	特定大学に対して	地域の各大学に対して

それから生涯学習機会を放送大学も提供しているわけですが、大学生になるわけですから、入学や受講の一定の手続きが必要になります。試験はなくても、受講料等々いろんなことが必要です。一方、放送公開講座は、スクーリングを受ける場合は別にして、テレビを見たりあるいはラジオ聞いたりするだけですと、個人で勝手に、手軽に、身近に親しむことができるということで、この機会の便利さという点では、これはまったく性格が違います。

また、テーマ設定という点では、放送大学は全国共通に流す番組ですから、何々科目という共通テーマが設定される。ところが放送公開講座の方は、ラジオであれテレビであれ、各地域の住民の方々のニーズに出来るだけ応えようということで、地域によってテーマ設定が違うわけです。全国共通のテーマと、各地域独自のテーマということで、これも性格を異にする。

それから内容ですが、放送大学の場合は大学教育の科目であるのに対し、放送公開講座は大学の科目というより、むしろある特定の地域のニーズに基づいた特定のテーマについて、各大学の研究者が単独であるいは共同で研究した成果を還元する、あるいはテーマに即して、これまでの学問研究の一端をご披露する、ということで若干性格を異にいたします。

教材開発という点でも、各地域的に根ざした多様な開発に基づいて、全国各地で放送がされてきました。そして、教育方法の改善。これがこの実験放送のもともとの狙いで、放送大学での方法を改善していくためのものだったわけですが、実際には各大学で、先生方が沢山参加して、放送局のスタッフの方々から、いろんな助言や指導を得ながら、教育方法の改善が各大学独自に大きく広がっていったというふうに思います。

さらに大学への理解ということなのですが、放送大学に対する学生の理解ということではなく、各地域の各大学に対して、大学ではどういう研究をやっているか、どういう先生方がいるのか、どのようなスクーリングをやるのか、というようなことへの各地域の理解が各大学に密着した形で得られるという形になっていったと思います。大雑把に思いつくまま、両者の対照表を作って眺めてきたわけですが、当初の実験放送の目論見とは違って、放送公開講座は思いがけず、まるっきり独自の成果を生み出してきたわけで、それが先程申し上げた開かれた大学づくりということに一言でまとめられるかと思えます。

さて、その開かれた大学の創造ということなのですが、今の時点から申し上げますと、今日の大学改革の先取りではなかったかというのが私の率直な感想です。図1をご覧ください。開かれた大学と申しましても、幾つかの側面があると思うんですが、ひとつは地域住民がいて、そしてメディアがあって、さらにスクーリング等々でご協力いただく生涯学習機関があって、そういう地域社会に大学が開いていくという側面があります。つまり、人々のニーズに応えながら、生涯学習ネットワークの一環として大きな役割を果たすというのが、この講座でした。これは午前中さまざまにご議論された内容と、重なるわけです。

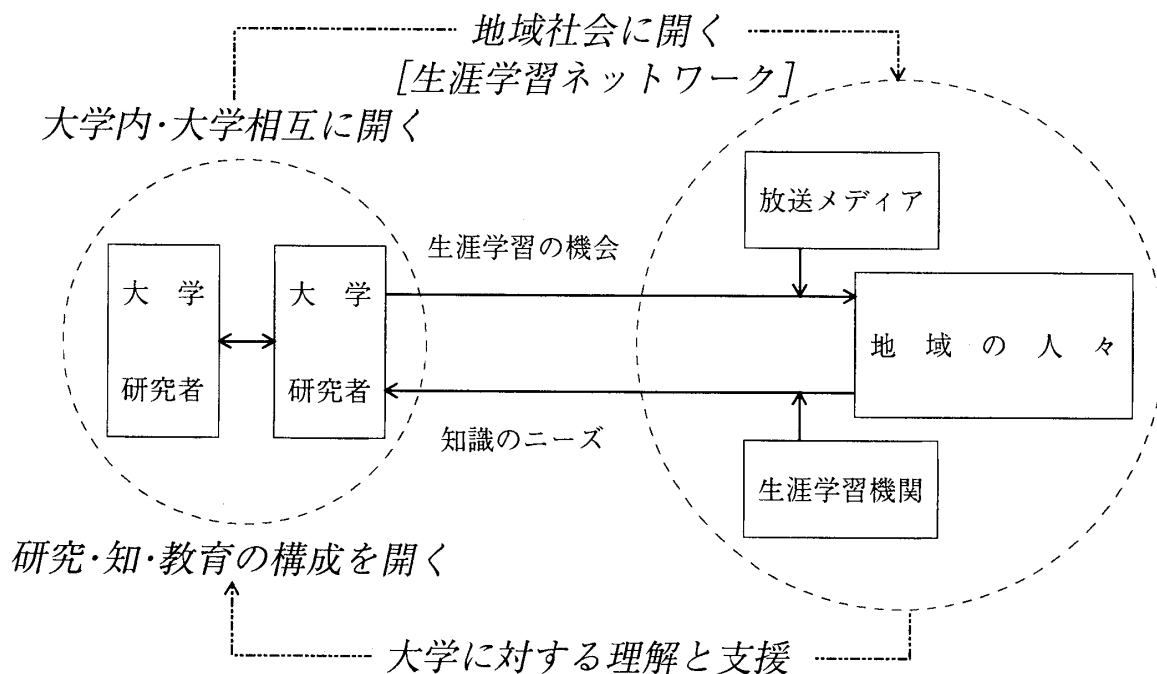


図1 大学放送公開講座＝「開かれた大学」の創造
大学改革の先取り

2つめに、開くというのは、研究そして教育を通じた新たな知の構成というものを開いていくという側面も思いがけない成果としてあったのではないかと、思います。

つまり、大学が地域社会に開いていく中で、しかも不特定多数の方々を相手にして知識を伝達をしていく場合に、単に研究で得られた成果を難しい学術用語を使って、しかもアカデミックな論理に従って、そのままストレートに伝えていっても、それは伝わり難いということがありますから、そういう人々に対してどういうふうに分かり易く、また噛み砕いて伝達していくことができるのか。しかも一方では、地域からこういうテーマについてやって欲しいというニーズもあるわけで、それではその知識のニーズを大学がどういうふうを受け止めて、大学としてどういうテーマとして設定していくのか、という別の回路もまた重要だということに、我々は気付かされたわけです。

放送公開講座を総括するハンドブックの中の冒頭で、広瀬先生がまとめていらっしゃいますけれども、20年間の講座のテーマというのは、地域に密着したテーマが非常に多いわけです。大学が大学の中だけに閉じこもって、いわゆる象牙の塔というふうな感じで、アカデミズムの世界の中だけで完結してしまうような、そういう展開ではなくて、むしろ人々の生活に訴えるような、あるいは役立つような、あるいは地域の人々が求めているような、そういうニーズに基づいた研究をどういうふうに展開していくのか、というところが求められてきた。それに、我々はとにかく応えていかざるを得なかった、ということが研究、知、教育の構成を開くという成果としてあったのではないか、と思います。

しかも、この教育の面ですけれども、これは後で中本先生の方からお話があると思いますが、大学の講義とは違って、多様な人々に対して、どういう教育の方法をやっていくのか、内容をどういふふうにかみ砕いて再編成していくのか、どういふ言葉の使い方をするか、どういふ映像を使えばよいのか、どういふ音声の素材を使えばいいのということで、とにかく30分あるいは45分なりの番組を1本つくるだけでも、大変な工夫を要求されてきたわけですね。この研究と知と教育、この3者の新たな創造という、そういう構成を開かざるを得なかったというところが、第2に指摘したい点です。

それから3つめに、開かれた大学のポイントとしては、大学の中に開いていく、あるいは大学相互の間で開いていく、ということがあったかと思っています。一言で言うのはちょっと語弊があるかも知れませんが、ともすると大学の中は、それぞれの研究室で閉じこもりがちですし、専門の中で研究をするので精一杯という傾向を持ちがちです。

それが、番組を作る、放送公開講座を運営していくという時には、少なくとも1つの大学の中で、学問領域を越えて、研究室を越えて、大学の中で開かざるを得なかったということがあります。さらに大学を越えて、地域の幾つかの大学で、あるいは遠い大学の研究者とも相互に連携をしながら、研究を新たに組み立てていく。そして、それをメディアに乗り得る知という形で構成をして、それを不特定多数の人々に伝達をし、教育を担っていく。つまり大学の中の連携、あるいは大学相互の連携ということが、開かれた大学として要請されてきた、と言えると思います。

こうした3つの点で開かれた大学ということをつまみ直しますと、我々の行ってきた放送公開講座は、制度の改革ではないかもしれませんが、研究の改革、あるいは教育の改革、あるいは大学の運営に関する改革にはかならないわけです。

今日の大学改革というのは、どちらかという行政主導のような感じが見受けられます。し

かし、私達がこの20年間にやってきたことは、そういう他から何か強制されて改革せざるを得ないということではなくて、むしろ放送公開講座を実際に作り出し、運営していく中で私たちが追求してきた、大学人自らの手による内在的な実験ではなかったか、というふうに考えるわけです。

ということで、私が申し上げたいことは、原理的というか、基本的な性格のレベルに関する話ということになるわけですが、今ようやく大学改革が全国的に論議が高まっているなかで、私達が20年間の間に培ってきた大学人独自による、しかもメディアに携わる方々、あるいは地域の生涯学習に携わる方々と連携をしながら、開かれた大学づくりをやってきた成果は、ますますこれから大学改革の時代に生かしていかないといけないし、また当然生きてくるものだと思います。取りあえず以上です。

広瀬：今津先生、どうも有難うございました。先生が言われる開かれた大学づくり、大学改革の先取りとしての開かれた大学づくりが、この放送公開講座20年の歴史の中で培われてきたという言葉、大変重要な点だと思います。また、大学の中で、従来は当たり前だと思われていたことが、本当に人に分かってもらうとはどうしたらいいのか、例えば声の出し方、テロップの見せ方、映像の使い方、そういうことをもう一度、研究者がいちから始めて、もう一度自分の授業を見直すという点でも、大きな役割を果たしたということをご指摘いただきました。大変重要な点だと思います。また、この中にこそ大学改革の行方、そういったものを沢山含んでいる、豊かな資源になったのではないかと思います。有難うございました。

それでは次に、熊本大学の教育学部教授でいらっしゃる中本環先生にお話を伺いたいと思います。熊本大学は、昭和55年から放送公開講座を実施され毎年素晴らしい作品を送り続けてきた大学のひとつでございます。まあ、老舗のひとつと申し上げても過言ではないと思います。熊本大学の講座の特徴として、熊本の独自のものを積極的に取り上げる、例えば熊本城を科学する、あるいは熊本の文学や阿蘇の自然といったようなもの、地域に密着したものを、いかにアカデミックな研究の視点をもって表現していくか、そういうものに努めてこられた長い歴史がございます。中本先生は、放送公開講座の委員長として、お仕事をお願いしてまいりました。それでは、中本先生どうぞ宜しくお願いいたします。時間はたっぷりございますので、宜しくお願いいたします。

中本：どうも失礼いたします。先程は、名古屋大学の今津先生のお話をお聞きいたしました。全くその通りで、先生のお纏めになりましたお話を一々もっともとお聞きいたしました。有難うございました。いろいろ教えていただきました。

さて私はこれから少しお話をさせていただきます。私の立場を少し申し上げておきます。私は文系の人間でございます。教育学部におりますが、国文学の方を研究しております。良寛さんと一休さん、ああいう人達、それから五山文学などという、日本の古典文学に関わっております。そういう文系の立場から、公開講座に参加してまいりました。それから、実際の放送の方ですが、ラジオを4回、それからテレビを1回、ということで参加いたしました。現在は、放送公開講座の実施委員会の委員長ということで、ここ数年やっております。そのような立場

で、多少一般的なことから少し偏った発言をするかも知りませんが、どうぞお許し下さい。

開かれた大学への歩みと、先程今津先生のお言葉にありましたけれども、この20年間私共の意識としましても、そういう開かれた大学への歩みという流れの中で、過ごしてきたように思います。そういう中で自ずと、いわゆるこの標題でもあります「知の再構築」ということが、自然的に行われてきたと思います。そういう知の再構築ということは、取りも直さず、放送公開講座から与えられたと言いますか、我々が得たものであったわけであると、そういうふうにも思います。さて、この開かれた大学への歩みということから考えていきますと、私共の大学では、これも多くの大学と同じかと思いますが、一般公開講座というのがございます。その一般公開講座では、それぞれの講師が自分のテーマでもって、講義題目を決める。それに合わせて、受講者が大学まで足を運ぶという形を採っております。そういう中で、学生に対するものとは違う講義の仕方を、当然要求されまして、年齢層も様々、それから仕事、職業も様々な方達がおいでになりまして、そういう中でどのように分かり易く講義をするかということで、十分鍛えられたのであります。そういうところから、開かれたという大学への歩みは始まった、と思います。それからもう1つは、県とか市とか、あるいは色々な地方の各行政単位で、公民館その他ございますが、そういう所へ呼ばれまして、そこで講義をすることもありました。大学から我々講師が出まして、そして自ずと、出る時には門を開いて出て行きまして、そこで講義をするということが、近年これは、色々な方面で盛んであります。そういう中でも、大学は少しずつ開かれていった、というふうに思います。さて、そういう準備がありまして、その流れの中で放送による公開講座が入ってまいりました。このことの開始と同時に、徐々に大学内部で申しますと、一般公開講座の方の講座数が、私の大学では減ってきたように思います。事実私も、一般の公開講座の、もう大分前になりますが、27、8年前ででしょうか、その頃は講座が10何本もあったと思うんですけども、現在は2つぐらいになっております。最初の頃、私もずっと参加をしておりましたんですけども、近年、そちらの方は開いておりません。

それは放送による公開講座が、開かれた大学を推進するのに、一般公開講座よりも力を持ってきた、ということじゃないかと思うんです。実際、これは放送によりますから、受講者の数も全然違いますし、まあ現在テレビ、ラジオというものが、どれだけ伝達力があるかは、もう言うまでもありませんので、当然の結果かと思えますけれども、そういう流れがありました。

さて、放送による公開講座が始まりまして、当然あるテーマでもって、その講師陣が集まります。そこで領域の違った者達が、話し合いをする。主任講師がおりまして、その主任講師の元において、いろいろ内容の調整が行われます。そういう中で気付いた事柄というものは、これは私のみに関わらず、色々な先生方に、色々な形で浸透していったらと思うんです。私はラジオの方では、4回参加いたしましたけれども、私は、国文学というものの内部で研究しておった者でありますけれども、色々な研究者の方達と、学部を越えて話し合いができて、私のアンテナも広がったと思います。そこに入ってくる情報も非常に広がった、ということは確かでございます。

また、これはテレビでしたけれども、その時に「古い」というテーマで、これは2年前にあったんですが、主任講師は医学部の原田教授でありましたが、この医学の方面からの「古い」

というテーマでしたけれども、文学、国文学をやっております私にも声がかかりまして、考えてみるということでありました。私には、そういう老いというものの、医学方面から提供されるべきものが、国文学の人間にそれを突きつけられたと言いますか、期待されたということが、やはり大変なことで、有益な刺激でありました。私の研究しておりますその学問が、老いとか、老いの先には死がありますので、そういうものに対して発言できない、何らかの寄与ができない、そういう学問であったならば、これは何なんだというふうな思いが、自分の中でも芽生えまして、それでもって勇気を起こしてと言いますか、ファイトをもってその講座に参加し、無い知恵を絞って話したことでありました。

これはちょっと横道に外れますが、私は良寛さんとか一休さんというふうにやっておりますので、その良寛の生涯、そしてその死、一休の生涯、一休のその死、あるいは彼らの活躍時期と老いの時期というのがありますが、そういうものをずっと考えてきたわけですけども、それを一般の人に、不特定多数の人達に向かって話すということは、私の中で、ただ単に易しくするという問題ではなくて、学問というものは何なんだと、分かり易く話さなければ、もっと言うならば、何にも知らない人に対しても分かってもらわなければ、それは学問という、何と言いますか、私自身にとってはですね、それはちょっと意味が薄いんじゃないかという突きつけていいいますかね、それがずっとありました。

それ以来というわけではありませんけれども、私自身振り返ってみますと、そういうことからですね、いわゆる老人ホームとか老健施設とか、あるいは病院の寝たきり老人とかにですね、ある病院に行ってサンタクロースをやってみたり、寝たきりの人にいろいろ回らして話してみたり、色々なことをやるようになりました。本当にこれは、こんな場で言うことではないかも知れませんが、有難いことであつたわけでありまして。

そんなことは色々ございまして、医学というものと、あるいは生物学など、この先生方との話の中で、色々なものを得ることが出来ました。これは、そういう機会がなくても、元々やるべきことであつた。国文学というふうなものに閉じこもるんじゃなくて、医学、あるいは工学、あるいは理学ですね、法律学、様々な分野にわたって、あるいは農学とかですね、食べものや住まいなどの中で人間の問題を考える、文学を考えるべきであつた、ということなんでありましようけれども、放送による公開講座という、こういう機会が与えられて、私の中でそういう問題意識が起こつたということも、また事実でありますので、それを申し上げておくべきかと思ひます。

さて今度は、このテレビの場合も、ラジオの場合もそうでしたけれども、放送をする、番組を作る場面でのこととありますが、私共の方では、視聴者の方を前にしてお話をする、という形を採っております。当然、そういう人達と親しく接するわけでありましてけれども、そういう人達の前で話をしておりますと、受講者の反応は、大学で学生の間起きる反応と極めて違う面が出てくる。とても違う面が出てくる。

たとえば、50年前の戦争の時に夫を失つた方、あるいは子供を失つた方、息子を失つた方とか、色々まじっておられます。そういう中で、その戦争のこととか、戦後の苦労の話などが交わってまいりますと、そつと涙を拭いておられるというような方がおられる。あるいは癌にまつわる話をし、生前の告知の問題、あるいはその逆の問題、というようなことを、話題に私

いたしますと、本当に胸詰まるような表情で聞いておられて、やっぱり泣いておられたりする。後でも、切々と話しに来られる、というような反応があります。

こういう反応を見ておりますと、学問というものが、あるいはもっと言いますと、大学のシステムというものが、これで、現在の状況でいいのであろうかどうか、という問題まで、私の思いとしては流れていくのであります。このことは、公民館でも文化サークル、いろんなカルチャーセンターなどでも経験済みではありましたけれども、放送による公開講座でもって一層深まった、というようなことをごさいます。

さて、今も触れましたけれども、大学というこのシステムは、高校卒業生を受け入れる、という形が前提となっております、例外的な措置は沢山ありますけれども、それでもやっぱりこれは、高校生が高校を卒業して入ってくる、というシステムであります。そういうことでもいいか。学びたい時に学ぶということが、やっぱり一番だ。そういうことで放送大学というのは、そういう主旨で出発したと思いますから、それはそれで大変結構なことであると思います。しかしながら、更に地域に密着して、その地域に存在する大学が、このままでいいだろうか、もっと門戸を開放する必要はないか、と思うわけです。入学する、受け入れるその受講生のことを考えますと、色々な制限というものを、もう一度考えるべきだ。まあ、もっともこれは制度の問題と同時に、受け入れ側の講師の、我々の意識の問題もごさいます、ともかく一応大学のシステムということにしておきます。

さて、高齢者の方々の学習意欲というのが非常に高まりまして、生涯学習ということが非常に盛んでありますが、この流れはずっと続いて行くでしょう。そういう流れに沿って、これからの開かれた大学というものは、色々な構造上の改革を迫られていくであります。そういう中で、ひとつ…、そうですね、会社勤めをしているけれども、1年間は大学に行ってみたいとか、半年行ってみたいとか、あるいは育児の期間で会社を休んでいるけれども、その時に子供を連れて大学の講義を聴きたいとか。また様々な形で、老若男女問わず、色々な形で勉強したいということがあるかと思えます。学習したいということもあるかと思う。そういう受け入れの体制が必要だなあという意識が、私には深くなりまして、これは私に限らず色々な先生方にも、多分あるんじゃないかと、いろんな人と話合いますと、そういうことが話題になります。まあ知の再構築というのは、受講者の方々が迫ってきたというふうなことではないか、ということも思えます。

これからは開かれた大学という場合に、門は開いた、さて入っていらっしゃいというふうな形ではなくて、開いたらこっちから今度は出ていく、そういう時になるんじゃないか、というふうに思っております。以上でございます。

広瀬：熊本大学の中本先生、どうも有難うございました。特に先生が制作、出演というご自身の体験を踏まえて、研究者としてあるいは学者として、自分の中に、学問とは何であろうかという、そういった根源的な課題を突きつけられたという点が、この放送教育の大学講座に携わってきた多くの方達にとっても、大きな意味をもつご発言ではなかったかというふうに思えます。また、この放送利用の大学講座が、大学のシステムそのもの、つまり学びたいという人がいったい何処にいるのか、その人達のニーズにどうやって応えていったらいいのか、先程今津

先生がおっしゃったような、開かれた大学づくり、大学改革の先取りの中で、どのように具体的な問題を、具体的な形で私達大学人が体感することが出来たか、そういったことを纏めていただきました。大変有難うございました。

それでは次に、指定討論者といたしまして、こちらにいらっしゃいます東京経済大学のコミュニケーション学部の山中速人先生にお話を伺いたいと思います。山中先生は、元々は社会学を専攻なさっている研究者ですが、インターネットを通じて、映像や音声に乗せて、公開授業や市民大学講座を実施している、大変新しい、ユニークな研究をなさっておられます。特に、最近ではフィールドの現場、例えば神戸の震災の跡地からライブ放送を行い、それに関する議論を日本全国で巻き起こしていく、いわばライブ感覚のあるご研究をなさっていらっしゃいます。それでは先生、どうぞ宜しくお願いいたします。

山中：東京経済大学コミュニケーション学部の山中です。国立大学の先生方が多いなかで、私は私立大学でいま仕事をしてしていますが、このセンターに今から6年ぐらい前までは、教官として仕事をしてきました。長いお付き合いでございます。今のお話を伺ってしまして、一番感じることはですね、何と言いますかね、大学を開くことの喜びというようなものが、それぞれの先生方のお話の中から滲み出ている、というふうに思いました。大学を開くというのもですね、一般の視聴者の側だとか、市民の側から大学を開けて突きつけられて、そして嫌々開くって言うのでは、あまり楽しい話ではないんですが、大学の側からこう開いていくことがですね、非常に喜びに繋がっていくと。それは単に人間的な喜びだけでなく、研究者としてですね、また教育者として、大学を開いていくことが非常に喜びであるし、開きたいというふうな強い意志というか、欲求がこう込み上げてくる、というのが正しい知の開き方ではないかな、というふうに思います。

今から10年ぐらい前に、世界的なコミュニケーション研究の親分みたいな人なんですけども、カツツという、今はヘブライ大学の先生をしてしていますが、アメリカでマスコミ理論の体系を説いた人なんですけども、この人と話をする機会がありました。その際、最近のテレビの話になったんですけども、カツツはテレビメディアの祝祭性、要するにお祭り性を非常に強調しておりました。カツツはメディアイベント論というのを、最近出しまして、非常に文化社会的にも注目されているんですが、このまあテレビメディアの祝祭性というのはですね、実はこの放送教育、それから公開講座なんかにもですね、非常に言えることだと思います。実際体験された先生方は、そのとおりだなあというふうにお思いだと思いますが、実際番組を作っていく過程、例えば取材に出るとか、それから収録をする、スタジオで撮る、例えばマイクをこっそり背広に仕込む、音の調子を確認する、色を、中にはドウランを塗られた方がいるかも知れませんが、そういう体験それ自体がですね、非日常的な体験なんです。

研究者っていうのは、基本的に地味な作業でありまして、それに日々費やしているわけなんですけども、そういったところから離れて、自分の研究成果というものを人々に伝えるために、いろんな努力をするし、それから放送局の人達と協力をしあって、そういうものをですね伝えていく色々な作業を共にする。集団でする楽しみもありますし、それから自分が考えていたことを、美しい映像によって表現するという楽しみもあるわけですね。そういうふうなものがや

っぱりないと、面白くないし、そういうものに支えられて、この知の公開ということが、実質性を帯びてくるんだ、というふうに思います。楽しくないことは、やっても面白くないし、見る方も楽しくないわけでありますから、たとえ出来上がった番組の中で、仏頂面してしゃべっていたとしてもですね、実はその放送番組を制作する過程自体が非常な喜びであったということは、皆さま方、共通して領いていただけることだと思います。

ただ、しかしですね、それとそれから大学の知の資産といいますか、それをですね広く一般に公開していくことは、まだまだ違った方途を考えなければならないと思います。それはですね、1つはこのような公開講座を作ったりするという、放送番組を作ったりということは、研究者にとってみればですね、ひとつのハレの時間をそこで出現するというにはなりますが、じゃあ普段のですね、日常的な研究活動なり教育活動というものを、いかに公開していくのかということに関しては、幾つか課題が残されているのではないかと、いうふうに思います。

1つはですね、この放送利用の公開講座でもですね、大量の番組をたくさん作って幅広く提供した、ということは偉大な成果なんですけれども、しかし大学が手掛けております学問の広がりたるや、それどころではないわけですね。こういったものを、如何に公開していくのかと。大学の教育というのは、初等、中等教育とは違ひまして、まあ多品種少量生産なんです。で、数限りなく、星の数ほど分野はあるわけです。こういったものを如何に公開できるのかと。放送という手段を使う限りではですね、そういうところでは、未だ道遠しという感じがいたします。

それからもう1つはですね、主に教育という分野でこういう努力はなされるわけなんですけれども、しかし大学の教員は基本的にアイデンティティーとしては研究者なんです。教育に自分のアイデンティティーを教育の中だけに見つけるというのでは、大学の教員に恐らくなっていないわけで、そうではなくて、研究者としてのアイデンティティーをいつまでも持ち続けるということが、これは大学人としての誇りだと思います。そういう場合にですね、教育というものに、放送番組を作ったり、それから自分のその成果を市民に伝える形で発表していくというのは、大変手間がかかるわけで、それに実際の自分の研究時間だとかそういうものを考えた時にですね、どれだけこれからもっと幅広く公開していくっていうことを考えた時に、限界がでてきやしないか、という問題があります。

こういった問題、それからもう1つはですね、今日の大学改革に関連するんですけれども、教員の評価なんていうのは、これはシビアな、最近そのファカルティー・ディベロップメント (faculty development) だとか、大学の自己点検、自己評価なんていうのもありますから、そういう教員評価の中で、こういうふうな大学の知の公開に注ぐ努力というものをですね、いかに業績の中で評価していただけるのかという、こういう問題もシビアな問題としてあると思います。

それから放送番組を作ることによってですね、幾つか見えてきた世界があると思います。それは後でこの話は続きがあると思いますが、映像によって伝える、映像や音声を使って伝える、というその伝え方とですね、それから我々が普段研究の成果を発表する時に行います書かれた文字だとか、図表といったようなものを組み合わせて発表するということの差、表現の手法の違い、といったようなものが問われているのではないかと思います。この際に大事なことはですね、映像ということなんです。素晴らしい映像が伴うから、それだけリアルな訳ですね、

知の伝達も可能なわけですが、しかし我々はですね、普段映像を多用して研究をしているかという、そうではないというのが現実だと思います。

僕は、研究と教育のことを考える時にですね、研究を川上に喩えれば、教育は川下にあたる。優れた研究活動があるからこそ、それが教育に反映して素晴らしい教育が成立つと考えるのであれば、映像利用も同じことでありまして、研究の場で優れた映像の収集、それから映像の制作というのが行われないう限り、教育の場面だけで、映像を利用するとしても無理がある、というふうに思います。例えば、文化人類学者がフィールドワーク (field work) で素晴らしい映像をですねビデオに撮り、写真に撮り、それを持ち帰ると。それを初めて教育に、素晴らしい映像や写真が使えるのでありまして、教育のためだけにですね、じゃあ映像を収集に行くなんてことは、これは研究者にしてみたらですね、本末転倒の世界だというふうに思うわけですね。こういうところが次の課題として出てくるというふうに考えました。

それからもう1つ考えたいのはですね、これまでメディアとして放送というものを使ってきたわけですけども、そういうふうなもの、メディアとしての特性というもの、それから能力というもの、限界というものを、やっぱりこの際、しっかり考えておこうということが必要だと思います。私はいま放送を使わないで、インターネットを使って、音声、それから映像を伴ったインターネットによる大学の公開の試みをしているんですけども、1つは予算が無いということもあります。こういう素晴らしい設備がありませんので、予算が無いということもありますが、しかしインターネットならではの知の公開の仕方というのもですね、その実用の段階に入ってきていると思います。例えば、放送の場合ですね、

今回の放送講座のそれぞれの番組を見ましても、マスメディアとしての放送を利用しているんですけども、しかし実際追求されたものはですね、それぞれの地域のローカルティーだったというふうに思います。これに関しては、優れた番組がたくさん作られました。しかし残念ながら、放送のネットワークの放送エリア、要するにキャベレッジ (coverage) の問題として、それが全国にですね、広く放送されるという機会は、それほど多くあったとは思えないんです。そういう問題もあると思います。

それから、受け手はやはり一方的でありまして、匿名的な人達に向かって放送電波を届けたという特性があると思います。これはまあ放送による教育というものの持つ本質的な問題でありまして、それが良いとか悪いとかって言うつもりはないんです。ただ、メディアの、非常にメディアテクノロジーの発達というものを前提にしてですね、これまでこういうメディアを使った教育がですね、放送といったようなものに、手段がかなり狭められていたということがあるんですけども、インターネットを使えばですね、もう少し違ったタイプの教育の届け方が可能なんではないかと思います。

たとえば、私の経験で、いま現在公開しているインターネットにおける市民大学講座の経験を言いますと、受講生は全国に散らばっているんですね。ただ、受講生の数は全体で70名ぐらいという、非常にこじんまりした、まあ1つの大学で言えば、中規模の授業を公開している程度なんですけども、受講生は全国に散らばっております。海外からの受講生もあります。こういう形で、むしろローカルティーから離れて、むしろそれにグローバルなコミュニティーが対象となった形ですが、知の公開ということを考えれば、インターネットの方がそういう点では、コ

ストもそれから便利さからいっても、良いのではないかというふうに思います。それから、放送をしますね、そうすると直ぐに戻り回線で、要するにメールへどんどん質問が届きます。これは非常に面白いところでありまして、インターネットというメディアを使えばですね、どこにでもですね、情報をやりとりできるわけですね。こういうふうな擬似的なインタラクティブティー (interactivity) ということから、インターネットの面白さもあるというふうに思います。

それから誰が受講しているかということが、これは少しサーバーの通信記録を分析することによって、誰が受講していたかというのは、比較的簡単にわかると。こういう意味では、匿名的な受講生を対象としないで公開することが可能だ、ということなんですね。こういうふうな面白さが、インターネットを使った大学公開講座の可能性として、出てきたと思います。これは、非常に設備的にも非常に簡単に出来るし、それから少ないスタッフですることが可能ですね。それからもう1つの面白さってというのは、学生を参加させることが出来るということなんです。で、大学の公開講座の場合も、例えばスタジオ収録する時に、ゼミの学生達がワイワイと一緒にやるというわけにはいかないんでしょうが、大学の構内から放送を、正確には放送と言わないで、これはストリーミング・メディア (streaming media) というふうな言い方をするんですが、まあストリームを出すことで、自分達の、学校のですね学生達も、大学の公開に参加させることが出来るという、こういうメリットもあるんです。ただし、画質は悪いし、音声は時々止まりますし、それから受講生の数自体も、同時にアクセスできる数がまあ70名とか100名ぐらいに限定されるという、そういうまあ問題はありますが、そういうふうな技術的問題もですね、これから克服していけばですね、多様なメディアを使って、大学を公開していくことが、技術的にも可能になってきた、というふうに思います。

そういうふうに考えればね、放送による大学の公開も、それからインターネットによる公開も、いや違う公開の仕方もあるでしょうね、伝統的な方法もあるでしょう。こういったものに共通して言えることはですね、やはりコンテンツとしての大学における知のストックというのがですね、やっぱり確固としたものでないといけないと思いますし、そういう意味からはですね、常に研究者がですね、自分の知的な営みをですね、人の前で話す、聞いてくれる人の前で話す喜びというのがですね、こういうメディアを使って教育をすることによって、ますますこう活性化できれば素晴らしい、というふうに思うわけです。

ともすればね、学生さん、大学で、特にわたくし私学におりまして、コミュニケーション学部なんていうところにいますと、まあ鼻にピアスをした学生諸君だとかですね、頭が天然色になっている人だとか、授業中に爪を磨いている女の子だとか、色々いるわけなんですけれども、そういう学生さんは先生方のところはいかがですか、いらっしゃいますか。是非よかったら来ていただいて、一度私の授業を見ていただきたいんですけれども、そういうふうな学生さん達に、話を普段する大変な努力というのものもあるわけです。時々講演にいたり、それからまあこういうメディアを使って話をするとですね、しっかり聞いてくれる人達がいるということは、非常にこれ教育の喜びでもありますね。こういう喜びって、研究者は普段なかなか忘れてしまいがちなんです。自分の知的な発表は論文だとかそういうところに限られているわけですから。

しかしこういうふうな、まあ考えてみれば大学教育というようなものが持っている本質的な喜びのようなものを、教えることの喜びをですね、再び取り返す手段として、このようなメディアを使った、特に放送だとかインターネットを使った試みがですね、実は研究者の、その何て言いますか、生甲斐の達成化にも随分つながったのではないかと、いうふうに個人的には思っているんです。ちょっと取留めもなくなりましたが、少しこの辺で私の発言は終わります。

広瀬：山中先生、大変中身の濃いコメントどうも有難うございました。まずそのテレビメディアの祝祭性、今まで一度も人から見られるっていうことを、本気で考えたことのない教師達が、あるいは話をきちんと聞いてもらう、それもひょっとしたら興味のない人達に向かって、興味を持ってもらうために努力するという、こうしたことが日常的な研究活動を活性化していく、というご指摘をいただきました。また、単に教えるということだけではなくて、研究者としてのアイデンティティーを、これからこういったメディアを活用することによって、いかに向上させていくか、中身の濃いものにしていくか、そういったことも必要であると指摘されました。多くの先生方は感じられていると思いますが、教員評価では、とかく論文の数といったものが中心になります。しかし新しいメディアに知を乗せ、公開していくことへの努力が、どのような形で業績として評価されるかが、これから沢山の優秀な方達を、このメディアを利用した公開講座のような試みに引き込んでいくかにとってとても大きな問題だと思います。また、先生が現在なさっていらっしゃるインターネットによる市民講座や大学講座の試みは、放送を利用した公開講座などを土台にして次のステップに挑戦していると思います。こういう新しい試みが次々に生まれてることを知り、大変励まされます。ここで、山中先生がある意味では我々に苦言を呈したのかも知れませんが、メディアの限界という言葉をお使いになりました。私は、メディアの可能性と限界、というふうに置き換えさせていただきますが、映像と音声で伝える、これは今までの文字や図表による表現とはまた違うことですが、これがいったい知の公開、あるいは再構成にとってどんな意味を持つのか。受け手はどんなインパクトをもってこれを迎えるのか、また送り手は今までと違う表現方法をいかに扱った方がいいのか、この辺がまた大きな問題となります。ここで、映像、音声、つまりメディアの特性というものによって、この開かれていく知というものを、どのように構成し得るのか、メディア教育開発センターの井出先生にお話を伺いたいと思います。井出先生は、実は民教協のプロデューサーとして、この公開講座に10年もお付き合いくださった、いわば公開講座にとっても無くてはならない方でございます。井出先生のお話の後、知の公開とメディアの特性に関して、どのように考えた方がいいのか、ということも議論したいと思います。井出先生、宜しくお願いいたします。

井出：数年ほど前まで凡そ10年にわたって、公開講座の放送局側の制作担当として、お仕事をさせていただいた井出でございます。午前中のセッションで北海道放送の方から、易しくするという命題として行っている、という発言がありました。それから東北放送の渡辺さんからは、イメージ化ということ、それから最初、放送公開講座の課題を与えられた時には、番組になるのかということすら考えた、ということもお話されました。また中国放送の渡辺さん

からは、少しテキストとは着地点を変えるということ、学問に参加するというような形でやると、素材というものが整理されてくるのではないか、という良い考え方も出されました。私も放送公開講座を担当しながらいつも考えておりましたのは、そういうことの周辺でして、今日試みに、なぜ高等教育の内容が放送には乗りにくい点について、私なりに考えてキーワード的に整理したものがございますので、ちょっとご覧いただきたいと思います。表1

表1 文字と映像（放送形式による）の情報構造

文字による情報構造 (学術的世界)	映像による情報構造 (映像の文体)
論理的 定量的 明快な表現 分析的 一義的な解釈	感性的 情動的 情緒的 定性的 曖昧な表現 直感的 多義的な解釈 (モンタージュ) 状況提示 (中継性)
体系的 (内容 文体) 理解を前提としている	非体系的 (価値 文体) 理解を前提としていない 組み合わせによって劇的な映像 言語を生む

左欄は学問的な文体手法なり内容で、論理的、定量的、分析的等と並んでいますが、この延長線上に印刷教材としてのテキストがあると考えられます。右側の方は、一般的なテレビ番組について考えた場合ですが、テレビの番組といっても、一番右翼にありますのはエンターテイメントを志向したドラマとかバラエティーです。その他にも番組としては報道や中継番組など沢山ありますが、その中でテレビというものは大体一番右翼の方のドラマの手法あたりにベクトルが向いてゆきます。映画とかドラマを中心にして考えて右欄にその文体手法を書き出したものです。感性的、情動的とか、左欄との対比で並べてあります。上から二番目に曖昧な表現というのがございます。これは例えば、ある一人の人が浜辺なり、木の下なりに立っていて、カメラで10秒なり15秒撮った場合、ある意味が生じてくるということが、映像言語の最も基本的なことだろうと思います。それをさらにカットで割ると単に人が立っているだけでもっと意味が生じてきます。これが曖昧な表現方法であり、高等教育の内容から比べると感性的な情報という方に、針がずーと振れてくる、ということであるといえます。曖昧な映像手法であるからこそ、ドラマなどはどうやって何かをより正確に伝えていくかということが演出の努力の内容になってくると考えられます。多義的な解釈。これはモンタージュなどと呼ばれる手法ですが、ショットの撮り方や編集の仕方でいろいろと意味がでてきます。メディア特性が最も発揮できる文体手法です。それから状況提示 (中継性)。これはカメラそのもののもつ機能です。つまり事実を映すとか、そこにある何かニュース性のものを捉えるとかで、カメラの最も得意とする機能です。非体系的価値というのは、例えば愛とか勇気とか、そういう感性的な価値の

ことです。こういう形而上的な価値は、こうだからこうであるというマニュアル的なものはないわけで、そういうものがまた映像の文体に乗ってくるわけです。それから理解を前提としていない、と学問の世界と比較するにあたってあえて出したわけですが、エンタテインメントの世界などはおそらく体系的教育的な理解などとは相反する位置にあります。そしてそうであるが故に、組み合わせによって劇的な映像言語をもつことができます。しかし高等教育では、なかなかこういう映像言語を生む、ということが困難でして、いわゆる硬い感じのものになってしましますがそれはやむをえないことです。

今まで、表1にもとずいて学問的世界のことと、一般的なテレビ番組での扱う価値や文体について見てきたのですが、要するにテレビは時間的構造をもつメディアであり、それに乗りやすい価値や文体手法に向いているということを言いたかったにすぎません。この時間的構造、一瞬一瞬に流れてゆくという時間的構造をもつというのが大変くせ者でして、高等教育における理解、体系的な理解を運んでゆくメディアとしては大変不得手である、ということ言いたかったわけです。言い換えれば、知の構造は放送という時間的構造をもったメディアには乗りにくい、或いは乗せにくいものであるということです。もちろん知の構造に向けたメディア特性ももっています。例えば、事実としての動画的な映像を見せることなど最も得意とするものですが、理解ということがねらいや前提となってくると、途端に弱いメディアに変わります。理論言語が優先されてくるからです。

放送公開講座における大学側と放送局側との努力の内容は、この放送という形式には不向きな構造をもった知の情報を、いかに時間的な構造の中に入れてゆくかということであったと思います。しかし、この左欄と右欄の間にある制作技法の研究が、まだ殆ど具体的にマニュアル化されていないという非常に難しい問題を抱えております。

しかしながら公開講座で大変成功したものが沢山あります。私が担当させていただいた時でも、例えば北海道大学の「北海道の自然史」ですね、非常に良い講座でした。それから東北大学の「結晶」。これは大学院レベルの内容だったのですが、担当講師が「私は放送では解ったような気にさせれば良いと思ってやりました」ということをおっしゃたんですね。解ったような気にさせる、ということは、動機づけや表象とかに関係した大事なことのように思われます。表象にはイメージとかリアリティーとかナガがふられますが、見えないものを見えるようにするという意味に解釈しています。信州大学の農業を扱った講座も反響が大きかったように記憶しています。あとは広島大学の「広島経済」、琉球大学の地質を扱ったテーマの13本のシリーズ等。その他にもここには一々あげませんが沢山あります。

その中でも、もう11年も前になりますが、放送公開講座の10周年を記念してコンクールが行われ、1位になりました新潟大学の「脳の発生とその障害」という番組がございました。その第5回が文部大臣賞に選ばれたのですが、そのテレビはここでは見ることはできませんので大体の粗筋はそこに書いておきました。表2

表2 放送公開講座の一作品から

■新潟大学放送講座 脳の発生とその障害～その巧みなしくみを求めて

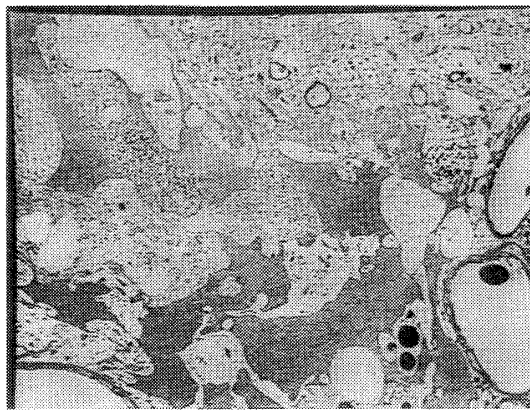
第5回 脳浮腫と頭蓋内圧亢進

主任講師 生田房弘教授 昭和63（1988）年度制作放送（TV）

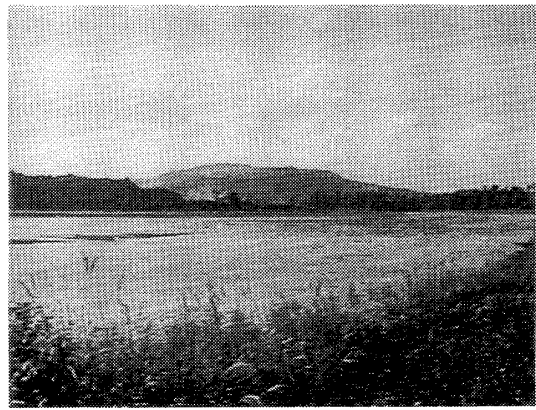
放送講座10周年記念コンクール文部大臣賞受賞

梗概

脳梗塞や脳出血による脳浮腫は脳死につながる大変危険な病状であるが、適切な治療がなされた後では細胞外の間隙に浮腫液が集まってくる。この浮腫液の中にある死滅した細胞片などがマクロファージや反応性アストロサイトによって取り除かれドラマチックな修復が行われることがわかってきた。このしくみは水玉のような胎児脳の中で行われるしくみとよく似ており、さらには水の中で単細胞が栄養を取り込む仕組みとよく似ている。脳の修復のしくみも、長い年月の間に生物が獲得してきた素朴なしくみによって巧妙につくられている。



脳浮腫液の電顕



信濃川

■学部学生の評価

先生、なぜあのように授業をやってくれないのですか。

この番組は主任講師がスタジオの左に立ち、右側のやや奥に助手の方が立ちましてスタジオを広く使っております。スタジオを広く使うというのは放送講座ではなかなかできないことなのですが、大変いい感じでスタートします。脳の浮腫がおこる脳溢血や脳出血は手術に緊急を要するわけですが、それは何故か。脳が陥没してしまうと脳死を起こしますので、それを救うという緊急性が初めに語られまして、手術後二、三日して症状が落ち着いてくると、患部の細胞の間隙に、つまり細胞外に浮腫液が集まってくる。その中ではマクロファージとかアストロサイトなどの細胞が、死んだ細胞や屑などを掃除するということが最近解ってきた。アストロサイトは、前は分裂しないと思われていたが、浮腫液の中で分裂し、しかも分裂した直後は動き出すという非常に驚くべきことが解ってきた。その浮腫液の中で修復が行われる過程という

ものは、水のような胎児脳の中で神経細胞ができあがってゆく過程、或いはもっと進化的に考えると、川の中で単細胞生物が栄養を摂り込んでゆく過程とよく似ているということなのです。生物が手に入れてきた素朴な仕組みを脳が持っているのだというふうに終わってゆくわけです。こういう内容の番組が1位でした。

そこでどうということが手法として採られたかということ、先程示しました。劇的な意味を生むということなのですが、表2で示すように、左の写真は講師が提示しました電子顕微鏡による浮腫液の中の反応性アストロサイトとかマクロファージの様子です。こういう仕組みが、信濃川の悠久の流れの中で行われている生物の素朴な仕組みと似ており、そういう仕組みを脳が取り込んできているというところで、番組の最後に信濃川の流れ（右側の写真）が出てきます。この、ちょっと異質な映像が組み合わされることによって、私たちの中に、ある見えないものが、すっと見えてくるという素晴らしい手法です。これが映像言語というものだと思います。そして最後に付け加えさせていただきたいのは、私も講師の生田先生のスクーリングに出席したのですが、スクーリングが終わりますと、テキストを持って先生の前に受講生が並びましたんですね。それは生田先生にサインをもらいたいということなのですが、こういう風景は公開講座では初めて見ましたですね。さらにそこに書いておきましたように、学部の学生が、この番組の13回のシリーズのどれを見たのか、或いは全体を見たのかかもしれませんが、「先生、なぜあのように授業をやってくれないのですか」と、講師の生田先生に言ったということを別の先生からお伺いしました。

では学部の学生が“あのように”と言った内容を、この番組分析から考えてみると次のようなことが言えると思われまます。

- 1) 講師の生田先生が、人間の脳がいかに素晴らしいか、という感性的な流れを常に通奏低音としてつくり、その流れの上に知の内容を乗せてゆく手法がとられている。
- 2) 発見への好奇心（'86. 野沢）に訴える構成手法がとられている。
これは時間的構造をもつテレビの構成法として大事な手法である。講義の内容が研究の自分史と重なっており、驚くべきことに次のようなことが解ってきた、という言葉が番組の中で4回ほど発せられている。
- 3) 「ユリイカ！」（私は見た）がある。講師が見たものを受講生も見ることができる。最後の映像の組み合わせも効果的。
- 4) 学問の本質に触れることができる。

広瀬：井出先生、どうも有難うございました。「先生、なんであんなふうに授業してくれないの。」その一言に、まさにこの第2セッションのテーマは、集約されているのではないのでしょうか。つまり、テレビやラジオのメディアに乗せることによって、先生達がもう一度、教えるということ、学問とは何か、学ぶ喜びとは何かというものを考えなおさざるを得ないというわけです。

それでは、各地のサイトに回したいと思います。まず新潟大学の方から、第2セッションについての、どんなコメントでも結構です。宜しく願いいたします。

萩野：新潟大学の萩野でございます。私は放送公開講座に関しまして、今から5年ぐらい前に、テレビの公開講座を担当いたしました。何を話したのか。ということからお話いたしますと、私は専門が政治学でございます。それで、政治学の中でも、選挙関係が専門なものですから、日本の政治の話をさせていただきました。ちょうど番組を収録したのが、確か西暦で言えば1995年の10月から、明くる年の2月ぐらいまで、担当いたしました。それで日本の政治のいろんなトピックスを、話させていただきました。ただ、内容から申しますと、政治の話、特に私は、現代政治の話をいたしましたので、いささか、何て言いますか、生臭いという言葉を使っていいかどうか分かりませんが、そういう話になりまして、ちょっと自然科学の公開講座とか、そういうものとは違ったものになったのではなかったか、という感じを持っております。18回ございましたけれども、そのうち11回は、私が個人でお話いたしました。その後はゲストを呼んだり、特に地域政治のお話もさせていただきましたが、その時には、県知事の実験者とか、それから地方の小さな市の市長さんに、実際に自分が在職中の経験を、いろんなエピソードを含めまして、お話をさせていただきました。そういう点では、興味を持っていただいたのではないかと、いう気がいたします。

この講座を担当いたしました。一体何を学んだのかということをお話いたしますと、これは2つあると思います。まあ視聴者からの反応ということもございしますが、それより前に、いわゆる制作過程ですね、番組を作る制作過程で、いろいろ学ばせていただきました。まあ先程からいろんな先生から、お話がございましたけれども、やはり大学教師っていうのは、あんまり教えるということ、中心的な仕事にしなければならないのですけれども、実際には研究者というアイデンティティーがあるんだ、というお話がありましたけれども、やはり教え方、どうやったら自分の内容というものを、分かり易く伝えることが出来るかということ、あまり体系的には考えてないわけで、ですから、実際にテーマを決めて、こういう話をしようということで、台本などを書いたりしますと、ディレクターの方から、これでは全然よく分からないとか、もう徹底的にその台本を直されまして、私は今まで、自分の考えていることとか、そういうことに対して、あんなにこっぴどく批判されたというのは、初めてでございます。ただ、その批判は、私にとって大変役に立ったと思っております。そういう形で、大変私個人は勉強になりましたけれども、終わった後の感想を少し述べさせていただきますと、これからのこういう試みは、まだ続くかも知れないので、そのことに関連で少し申し上げますと、いろんなことを考えて、例えばこういう映像を出して、もっと面白くしたいという具合に思いますが、映像著作権というのがございまして、それを利用するためにもう膨大な金がかかる。ドラマとかそういうものは当然のことながら、著作権があって大変だということは分かっておりますけれども、ニュース番組まで全部著作権がありまして、たとえば日本の政治のある話をする時に、こういうニュース映像があるはずだからこれを使いたい、というようなことを言っても、実際物凄く著作権料を払わないと、実際には使えないということです。そういう形で映像著作権というものを、こういう試みの場合に、比較的安い値段で、もっと自由に使えるようであれば、もっと素晴らしい番組がたくさん出来るのではないかと、いう気がいたしました。私の経験を簡単にお話いたしましたけれども、たまたまここに、番組を担当されたテレビ局の方がいらっしゃいますので、ちょっとその方にお話を振りたいと思います。

大沢：新潟放送の大沢でございます。59年度から、新潟大学放送公開講座が始まりましたが、その第1回から7年間、テレビ放送講座を担当させていただきました。先程の井出さんには随分いろんな意味で、ご指導いただいたりしました、大変有難うございました。大学の難しい講義、講座を、いかに易しく、分かり易く伝えるか、という議論が出ておりますが、私が当初から取り組んでいたことは、それを面白く、楽しく伝えるということでした。それはなぜかと言うと、なぜこの大学講座を放送でやるかということのをちょっと考えてみますと、放送ですから一般大衆、一人でも多くの人に対して伝え、また理解してもらうということでないか、この放送講座の、ひとつの目的は達成されないんじゃないか、と思ってたわけです。ですから、楽しい、面白くという部分を、どういうふうにするかということ、いつも考えてたわけです。

しかし、そのことは本当に難しいことで、私共が一番心掛けたことは、まず第1にあまりテキストに拘らないということです。私共はテキストを読んで、テレビ台本を書きます。つまり活字を映像メディアに置き換える作業をするのですけれども、それをそのまま、映像に置き換えていくのでは、易しく、楽しくも伝わっていかないだろうと。それで、あまりテキストに忠実にならず、テキストにあることを、そのまま詰め込むようなことはしないことを、まず第1に考えて、つまりこのテキストの中の何が伝われば、この30分の中で、あるいは45分の中で、何が伝わればいいのかというところを、主任講師の先生と、ぎりぎりの議論をしながら、出来るだけシンプルな展開、構成を考えるという作業をしてきました。シンプルな展開のひとつに、謎解きの手法を取り入れました。それが、先程、井出さんからもお話がありましたけれども、たとえば「脳の発生とその障害」です。なぜ脳の中に脳浮腫が起きるのか、実はそのメカニズムの原形が胎児脳の中にあつたと、で、その中に大切な要素は、「間」であつたという結論になっていくわけなんです。その「間」という一言に向かって、起承転結の構成を、出来るだけシンプルに、あまり沢山の情報を盛り込まないで伝えていくという、そういう作業をしてきました。ディレクターは文系の人間が多くて、自然科学系になると、なかなか理解できなくて、しかし我々としては、理解できないまま番組は作らないぞ、という基本姿勢があつたものから、非常に時間がかかりました。

そういう点では、講師の先生方にはご迷惑をかけましたけれども、それが出来たというのは、やはり大学の当局、講師の先生、それと放送局の信頼関係、というものがあつたからではないか、というふうに思いますし、そこで得たノウハウというのは、放送局にとっても、とても大きいものであつた、というふうに思っております。以上です。

広瀬：どうも有難うございました。新潟大学から、貴重なご意見をいただきました。荻野先生の、初めてこっぴどく批判されたというお話を伺い、この大学放送公開講座は、つまりは大学の教師達を、裸の王様にさせない役割を、担ってきたんだ、という気がいたします。また、大沢さんからは、作り手として、自分達が分からないものは作らない、作らせないぞ、というその気概が、この放送公開講座を支えてきたのだと思います。

それでは残り時間30分となりました。いろいろなサイトからご意見を伺いたいと思います。それでは信州大学の方に、マイクをお渡ししたいと思います。どうぞ宜しくお願いいたします。

高須：信州大学の高須でございます。次の5点に絞って、お話しさせていただきます。

1つは個性、2番目に連携、3番目に意識改革、4番目に改善、5番目に触れ合いと、この5つのキーワードでございます。うちの大学、当初はいわゆる先端技術の紹介と、そういう話が、多かったわけでございますが、1992年頃から、いわゆる信州における、つまり長野県における問題、とりわけそれと信州大学との関わりという意味で、個性というものが表面に出て、講義を持ってきたわけでございます。例えば野尻湖の問題でありますとか、あるいは信州の持っている繊維の歴史とか、あるいは信州大学に初めてできた感性工学、そういう学科の話から、それから肝移植の問題、そういうことが、信州大学の教育研究の特徴と地域との関連ということで、議論していったと。それを作る過程で、信州大学の個性とは何かと、何が自慢できるのか、という話が纏まってきたという意味では、我々が知の再構築という意味で、この期間は大いに学ぶところが多かったと思います。

2つめは、連携という問題でございます。これは、信州大学は、8つの学部が5つのキャンパスに、4地域で5つのキャンパスに分かれておりますけれども、それぞれのテーマについて、普通の一般の公開講座ですと、各学部で、単独で公開講座を実施しますが、放送公開講座の場合には、複数の学部が、なかには他の大学の先生も加わってもらって、これに取り組みます。そういう意味で、大学の中における連携プレーという形態で、これが作られていったと、これは非常に大きなことであります。例えば、医学部の先生と理学部の先生と一緒にやった、教育学部と理学部の先生と一緒にやった、そういう意味での連携が出来たというのは、これはとりわけキャンパスが分散している大学にとっては、大きな成果であったと思います。

3つめは、既に指摘がございました、大学教官の意識改革という問題でございます。これは、いわゆる開かれた大学づくりということで、これは先程から何度も繰り返しておられますので、あらためてということもありませんが、我々自身がこの間、やはり地域との、地域というのは、とりわけ世界も含めてかも知れませんが、いわゆるこの地域において、大学は何やってるんだ、とそういうことを意識する、また地域に貢献していくことの重要さということ、我々自身が学んで行く、長いプロセスでもあったし、これは今後には生かされるだろうと思います。

4つめは改善、いわゆる授業方法の改善の問題です。これはもう繰り返しません。うちの大学でも、それぞれの過程で、多くのいわゆる授業方法の改善の方向、何が問題かということ、体験した方は大いに学ばれましたし、その成果は各部局で印刷物として、普及されているわけでございます。

5つめは触れ合いという問題でございます。例えば、繊維の講座を持ったときには、いわゆるスクーリングの過程で、いわゆる意欲をもって会場に来られる方がいると、この染みをどうとるんだというような普段の一般公開講座では無いような問題を、普段の講義の過程で、いろいろ醸成されていたものが、スクーリングの場で、問題を突きつけてこられると、大いに講師の先生方も驚かれ、またやり甲斐を感じられたようでございます。野尻湖の問題の時には、実際に博物館に呼んで、スクーリングを行いました。ですから、いわゆる放送メディア、つまり映像メディアでの、いろいろ今まで話はあったわけですが、博物館の中で、実際にそのものに触れて、スクーリングを作る、そういうことが、それまでの講義とスクーリングが上手く噛み合っ、成果報告書などを見ておきますと、非常に反響が高かった、反響が良かったと

いうふうに感じます。また生体肝移植の、私はこれを唯一見学させていただいたんですけども、生体肝移植のところでは、実際にお医者さんも来られると、いわゆる比較的年老いた方も来られると、いろんな層が来られて、これはかなり専門的な、つまり生体肝移植の何がいまポイントなのか、という話まで突っ込んだ話から、一般的な健康の問題まで、話が及ぶという意味で、これは地域と大学との結びつきという意味で、非常に学ぶところの、まさに我々自身の、大学の在るべき姿、それを模索している段階の中で、学ぶべきところが多かったように、私は感じました。

問題は、これからの問題であります。信州大学50周年を迎えて、地域とどのように関連して行くかということで、いわゆる市町村、村に至るまで、地方公共団体に出前講師いうのでしょうか、私達が出掛けて行きますよという、そういうアンケートを取りましたら、これはもうかなりの市町村から、是非とも来てくれと言うわけですね。我々今まで、ラジオとかテレビとかを通じて、信州大学はこういうことをやっているよということを、訴えていたにも関わらず、その返ってきたアンケートは、信州大学はどういう先生がいらっしゃるかよく分からない、そういう話が多いんです。つまり大学は、かなり社会に発信しているつもりでも、社会の方からは必ずしも、それがよく分かってないという状況を、強く感じました。それにしても是非とも来てくれと、これはまあ放送ではありませんが、出前講師の派遣をかなり、いま具体的な話を煮詰めているところです。

私達は今後、次の3時以降のテーマになるんではしょけれども、如何に、地方に、放送メディアで培ったこの経験を生かしていくかという課題が残ります。もうこれで予算が終わりますから、いわゆる放送メディアを通じての地域との連携というのは、予算の関係でなかなか難しい問題を、いま抱えているわけですが、今後、どのようにして行くかと。それから、テレビやラジオで行われる、いわゆる放送大学の問題と、地方にいる大学と地方の人との連携、つまり生涯教育を、今後放送メディアを通じてやって行くかということは、長野県にあります民間の放送会社と一緒に、議論を煮詰めているところです。これは次のテーマになりますので、省かせていただきますが、大学放送公開講座の実施を通して、信州大学が得たものは、非常に大きかったということで、この5つのポイントに絞って、お話をさせていただきました。以上でございます。

広瀬：信州大学の方から、大変明快に整理されたコメントをいただきました。個性、連携、意識改革、改善、触れ合い、我々の議論の基盤になると思います。大変有難うございました。

それでは、大阪大学に移りたいと思います。宜しく願いいたします。

白樫：大阪大学の白樫でございます。まず最初に、一般公開講座について、ちょっとお話したいんですけども、大阪大学では、日本の他の大学に先駆けて、30年以上も前にですね、当時大阪大学文学部におられた、社会教育学の駒田錦一という先生が提唱されまして、一般市民向けの公開講座を、開始いたしました。これは歴史的にも非常に、早かったと思われまして、で、これが現在まで続いておりまして、毎年秋に、多くの市民を対象に続けております。それとの関係もございまして、この大学公開講座、特に放送を通じての講座についてお話したいと

思います。ここでは、大阪大学における私自身の体験を中心に、纏めてみたいと思います。

私自身は、1994年度の、当時まだ大阪大学ラジオ講座と言っておりました講座の主任講師を務めました。「ゆらぎの人間科学」というテーマで、45分の番組、13回のプログラムでございしますが、こういうテーマで放送いたしました。大阪大学では、どちらかと言うと理系の学部がテレビ講座を、そして文系の学部がラジオ講座というような感じが、最近続いておりました。かつてはそうでもなかったんですけども、最近はそうなってます。で、この「ゆらぎの人間科学」も、ラジオを通じて放送されました。大阪大学人間科学部は、日本で初めての人間科学部でございまして、人間を研究対象として、心理学系、社会学系、教育学系、医学系、生物学系等、様々なスタッフから構成されています。メインは、人間理解ということでありますけれども、この「ゆらぎの人間科学」というテーマで、講座を構成いたしました。結論的には、ラジオ講座として、初期の目的を達したと思います。

つまり、大勢の方が、熱心に聞いて下さいました。それで学部の中で、せっかくこれだけのチームが纏まったのだから、これを大阪大学の学部の学生、特に一般教育（現在では全学共通教育とっておりますけれども）の、全学共通教育の科目として出したらどうかということで、そのチームのメンバーがそっくり、半年間、ラジオ講座のテキストを、使用しながら講義いたしました。これは全学向けに開いたのでありますけれども、時間割あるいは場所との制約で、主として人間科学部の学生が受講いたしました。「ゆらぎ」というテーマを、人間科学部のいろんな分野のスタッフが、心理学、社会学、教育学等、様々な方向から、総合的にアプローチすることが出来るんだなというようなことを、よく理解してもらえたと思います。さらにまた担当する方も、こういう1つのテーマについて、心をひとつにして、共通に考えるということ、大変貴重な体験として学びました。

これはまた、私自身の個人の体験ですけども、20数年も前に、アメリカの大学で教えた時に、その大学にファカルティー・ディベロップメント・コミティーというのがございまして、そのプログラムは大変充実しておりました。その中で非常に面白かったのは、各学部の先生が、私はこういう授業をここでやってるよ、とお話になる、数学の先生、地理の先生、歴史の先生が、ご自分のお得意とするプレゼンテーションのやり方を、お話しておられまして、これは大変参考になりましたし、また人気がございました。これは現在でも続いていると思いますけども、日本でファカルティー・ディベロップメント・コミティーと言う時に、このような大学における授業の仕方についての、共同の研修というか、そういうものが果たしてどのくらい実現しているだろうか、というようなことを感じます。

これは「ゆらぎの人間科学」ではないんですけども、別の年に、ある講座に対して、受講生の方から、大変厳しい意見をいただいたことがあります。それは、あるテーマについて、講師の独りよがりである、その言葉が、一般に理解し難い、というようなことがございました。こういう受講者からのフィードバックというようなのも、アンケート調査の集計なんかを通じて切実に感じました。

日本の大学でも、授業のフィードバックもだんだん行われるようになってきましたけれども、このテレビ講座、ラジオ講座の場合は、単位を貰うとかがありませんから、受講者から非常に率直な意見が返ってくるんですね。そういうものも、私共報告書に一応載せておりますけれども

も、これを講師の方々のみならず、全学の先生がよく見ていただいて、ご自分の授業に生かしていただくことが出来ないだろうか、と思います。自分自身の経験で言えば、やはりプレゼンテーションの準備を十分にすることが大切だと思います。それからラジオ講座、テレビ講座では比較的自分が得意とするテーマをやるわけで、そういう点で、比較的纏まった話が出るのではなからうか、というような気がいたします。ただそういうプレゼンテーションの仕方についても、私共自身大いに学ぶことが多かったように思います。

それからスクーリングを経験して、受講者の熱意がいかに高いかということが、非常に強く感じられました。質問だけではなくて、ゼミに自分達も参加したいとか、あるいは実験施設を見たいとか、阪大の場合には実験施設を見学の時間を、場合によっては設けているんですけども、そういうものに対する意欲というのものも、非常に強いのを感しました。

今後のことについて、お話したいこともございますけれども、これは午後3時からの分で、また時間があればお話したいと思います。以上です。

広瀬：大阪大学の白樫先生、有難うございました。先生ご自身が携われた「ゆらぎの人間科学」というものが、全学共通教育講座になった。つまり、公開講座で行ったテーマが、大学の授業内容に返ってきたということで、大変貴重なご経験をお話しいただきました。また、スクーリングや率直な視聴者からの意見が、講師の独りよがりをなくすという点で、重要なお示唆をいただきました。

それでは、残り時間があと16分程でございます。様々な問題が提起され、それぞれ大変興味深く、一つ一つについてもっともっとお話を聞きたいと思いますが、まずここで、各サイトの方から、何かこれだけは言っておきたいということがございましたら、ボタンを押していただけますでしょうか。では名古屋お願いいたします。名古屋大学さんどうぞ。

今津：2つの点について発言をさせていただきたいんです。1つは山中先生が、テレビメディアの祝祭性ってということで、非日常の世界ということをちょっと触れられたんで、私が自分自身、テレビとラジオの番組制作に関わる中で、一番神経を使った点をいま思い出してんですけど、それは時間との闘いということです。放送番組の場合、30分ないし45分、と言っても正味は28分30秒とか43分20秒とかの非常に限られた時間の中で、分かっていたかような内容を、資料を使いながら話さないといけないっていうことは、難行苦行でして、放送局のスタッフの方にいろいろ助けてもらったんですが、要するに自分が抱えている研究のポイントと、それからこういうふうに伝えたら伝わるであろうという教育のポイントと言いますか、この2つのポイントをどう連携させて知を構成していくかということ。しかもそれが、僅か30分あるいは45分の中で、凝縮された形で作り上げないといけないっていうことは、普段の大学の講義のやり方とは、ちょっと違うわけですね。これは先程、阪大の白樫先生がおっしゃったファカルティー・デベロップメントに関わってくると思うんですけど、やはりティーチングのトレーニングに、放送番組作成は非常に役立つと思います。30分の中でどれだけ纏まった話が出るのかを資料などを使いながらきちっとやってみるというのは、まだ教え方に慣れてない若いスタッフの方とか、あるいは問題を感じてられる方々にとって、大変大きなトレーニングになる。

そういう点を、この放送公開講座というのは、突きつけてきたのではないか、と思います。

よく知られたマーティン・トロウの高等教育発展の3段階は、エリートからマス、マスからユニバーサルへ発展すると言われますが、日本の大学は進学率が50%近くになり、いよいよユニバーサル段階に達しようとしている、このユニバーサル段階になりますと、いろんな学生が入ってくるわけで、そういう意味でファカルティー・デベロップメントが大変求められてきますし、ティーチングをどうするかということが、忽ち問われてくるわけですが、これまでの20年の成果は十分に使うことが出来るのではないか、ということを感じました。

それからもう一つは、井出先生が、映像と文字を対比させておっしゃったことなんですけれど、私は、映像というのは、圧倒的に情報量が多い、というふうに考えております。文字の情報量よりも、映像の情報量が多い。ただし、文字というのが思考、考えるということと直結しているのに対して、映像も勿論考えることと結びついてはいるんですけども、むしろそれ以上に言葉にならない感性って言いますか、思考に対する感性、ここらあたりに映像というのは大変力を発揮する、そういう点で申しますと、ユニバーサルの段階になって、若いいろんな世代が大学に入ってくると、いわゆる映像世代ですから、古い世代とは違って非常に感性が研ぎ澄まされている。そうすると大学の授業をやる際も、やはりこの感性と対話出来るような形での授業を工夫していかないと、若い世代はそっぽを向いてしまうだろうと感じますので、これから映像をふんだんに使ったティーチングが求められてくるのではないかなと思います。

しかし他方では、若い世代の思考、考えるということはどうなのか。文字から距離がおかれ始めている若い世代を、今後感性から思考へと導くことも必要である。ここら辺の回路が、おそらく高等教育におけるティーチングでは、今後問われてくるんだろうな、と感じました。以上です。

広瀬：今津先生、大変重要なお指摘を有難うございました。思考と感性を、両輪にして、いかに新しい大学像を築いていくか、大学の授業を作っていくかについてご指摘されました。残りはあと10分で、こちら先生がおっしゃったように、時間との闘いということになっておりますが。また他にどなたかコメント、是非にということございましたら、ボタンを押して下さい。北海道からございますか。はい、東北から。では急いでまいります。北海道、宜しくお願いいたします。

阿部：北海道大学の阿部です。いまの今津先生のお話を、同じ内容ですが少しフォローしたいと思います。いま大学の流れ、教育の流れの中では、メディア、映像という流れがあり、メディア教育開発も、そういった流れの中であるのかと思います。ここで、先程、井出先生がおっしゃったことと非常に関係があると、いま今津先生がおっしゃったこととも関係あります。こういったメディア素材を使って教育することが、ベストなんだということではないということは、非常に重要であると思っています。感性に訴えて、学生は分かった気になります。そういったことで放送講座も成り立つようなことなんです、じゃあ何が分かりましたかと問いかけた時に、ほとんど分かってないという現象が起こりかねません。いうなれば、教える側も、教えた気になっていますが、本当はきちっとしたことは教えていなかった、ということになりか

ねません。そのことはメディア教育というものが発展していく段階で、そのことをしっかりとフォローする形が今後また必要だろうと思っています。

大学では、研究が非常に重要だということは、先程からも話しが出ていました。研究を踏まえていなければならない。研究というのは、理論の世界です。ですから、感性を理論にどうやって結び付けるかというのは、今後の教育の中で、非常に重要な問題です。以上、少しフォローいたしました。有難うございます。

広瀬：有難うございました。大変重要なご指摘だと思います。それでは東北大学、どうぞお願いします。

渡辺：東北放送におりました渡辺ですが、先程の井出先生のお話、それから今津先生のお話と関連して、それから今の北海道大学の阿部先生のお話と関連する「分かるとか分かり易いということは、一体どういうことなのか」と言うと、これは決してレベルを下げるという問題じゃないと思うんでね。講義のレベルを下げて分かり易くするというのではなく、まず取り上げたテーマについて「興味を持ってもらう」、「関心を持ってもらう」ところから始まると思うんです。そこには、ロジックの世界もありますが、勿論感性から入っていく方が、まず最初でないかな、という感じがします。それで、そこから進んでいって、今度は「面白いと思ってもらう」という段階に進み、さらに最後には、ラジオを聞いたり、あるいはテレビを見てる人達、特に若い人達が「自分もやってみたいと思う」ような気持ちになる。さらにもう一歩進んで、「その分野に進んでみたいと思う」そこまで行ったら、私は成功じゃないかな、というふうに思うんです。

広瀬：有難うございました。感性、興味、自分もやってみたい、そして最後に踏み込んでしまう、そういった流れのお話だったと思います。時間があと5分程度になってまいりましたが様々なご意見が出されました。これを一言に纏めるのは、大変困難ですが、大学が築いてきた理論、言語、それによる知の構成というものを、メディアを使って人々に分かり易く伝えるということ。このセッションで、知の再構成について様々な観点からディスカッションが行われたのではないかと思います。それでは、まだちょっと時間がございますので、山中先生、1分いかがでしょうか。

山中：有難うございます。最後に時間を下さいます。やはり放送メディアの持つ特性というもの、まあメディアはメッセージなんていう言葉はよく言いますが、大学の知をメディアの特性を生かして伝達するという様々な挑戦が、それぞれの大学、それから放送局でなされたと思います。一つ一つの番組が、そういう意味での挑戦の結果だというふうに見れば、多様なアプローチがなされたし、試みがなされたというふうに思います。こういう放送を使って教育を伝える、特に高等教育を伝えるという試みの大事な一里塚になったというふうに確信を強めています。

ただ、そこで、考えないといけないのは、放送メディアの持つひとつの限界、それから可能

性というものを、どこまで出し切ったかということです。意外と、使い古された手法に依存しているようなところが無かったかどうか、これは点検項目としてですね、今後の実践に繋げて行かなくてはならない、というふうに思います。そういう意味では、まだまだ可能性は残しつつ未来はある、というふうに考えて、メディアの未来も広がっていますけれども、従来の手法だって決して侮れない、というふうなところが、これまでの実践の積み上げの結果だというふうに、私は見させていただきました。どうも有難うございました。

広瀬：有難うございます。山中先生のコメントは、いつも我々が自己満足に終わってはいけないということ、本当にそれでは可能性の限界までチャレンジしたのかと問いなおすことの必要性、大変痛い指摘だと思います。それでは、このセッション、もうだんだんと終わりに近づいてまいりました。第3セッションでは「大学放送公開講座の遺産の継承」ということで、午前、午後と語られてまいりました「知の公開／知の再構築」また「地域と大学」ということを、今後どのような形で、次の世代に継承していったらいいかについて討議します。それでは、池田先生、どうぞ宜しくお願いいたします。

池田：はい、広瀬さんどうもご苦労様でした。山中先生、どうも有難うございました。大分、私の頭もヒートアップしておりますので、ここで少し冷やしたいと思います。第3セッションは15時15分から始めたいと思いますので、また宜しくご参集下さい。どうも有難うございました。じゃあ休憩いたします。